

自己卑下呈示と社交不安傾向に及ぼす文化的離反傾向の調整効果

○神垣るな・#松本美涼・尾形明子
(広島大学大学院人間社会科学研究科)

目的

自己卑下呈示とは「他者に対して選択的に自己の否定的な側面を呈示すること、自己の肯定的な側面を積極的に呈示することを避けること」であり(吉田・浦, 2003), 日本を含めた東アジアにおいてよくみられる行動である (Markus & Kitayama, 1991)。自己卑下は、精神的健康と関連することが示されており(外山・桜井, 2000), 特に対人場面での自己卑下呈示は、社交不安と関連する可能性がある。社交不安とは、対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安である。対人場面で自己卑下呈示を多く行う人は、本当はできることでもできないというような自己卑下呈示を行うことで相手から「そんなことはない」などの意味のフォローを多くもらったり、相手に自分の価値を低く見積もってもらうことで期待値を下げたりして他者からの評価に直面することを避けており、社交不安が高い可能性がある。

しかし、吉田(2013)は、文化的に自己卑下呈示を必要だと思っに行っている場合、精神的健康が保たれると指摘している。つまり、自己卑下呈示を行っていても、自己卑下呈示が文化的に必要だと捉えている人は社交不安が低い可能性がある。そこで、本研究は、自己卑下呈示を行う頻度が高くても、文化的離反(Cultural Estrangement: CE)の一因子である、自分が所属する文化において典型的な価値観と一致した行動をしていると見なししている考えである典型性と社交不安の間には負の関連があり、一方で自己が周りの社会から理解されないと感じる不一致と社交不安の間には正の関連があると予想し、自己卑下呈示と社交不安に及ぼすCE傾向の調整効果について検討する。

方法

対象者 研究参加の同意が得られた成人173名の内、文化的慣習、信条、態度であるエスニシティが東アジア文化圏だと回答した172名を分析対象者とした(平均年齢 20.56 歳, $SD=4.77$)。なお質問項目は Ethnic Identity Scale 日本語版(高嶋, 2022)のリード文を参考にした。

手続き オンライン質問紙調査を実施した。

使用尺度 自己卑下呈示: 自己呈示規範内化尺度(吉田・浦, 2003)の自己卑下項目(11項目, 5件法)を用いた。典型性・不一致: 文化的離反測定尺度(Cozzarelli & Karafa, 1998)の邦訳版である吉田(2013)の典型性因子と不一致性因子(10項目, 7件法)を用いた。社交不安傾向: Liebowitz Social Anxiety Scale 日本語版(朝倉他, 2002; 24項目, 4件法)を用いた。

結果

社交不安傾向を従属変数に、自己卑下呈示、典型性を独立変数とした重回帰分析を行った(Table 1)。検定の結果、自己卑下呈示の効果が有意であった。次に、自己卑下呈示、不一致を独立変数とした重回帰分析を行った(Table 2)結果、自己卑下呈示の効果が有意であった。

Table 1
自己卑下呈示実行頻度、典型性、交互作用項を独立変数とした重回帰分析の結果

	社交不安傾向				
	<i>b</i>	<i>SE</i>	β	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値
自己卑下呈示実行頻度	2.14	.24	.57 **	9.09	.00
典型性	-.50	.29	-.11 +	-1.78	.08
自己卑下呈示実行頻度×典型性	-.08	.04	-.12 +	-1.94	.05
R^2			.38 **		

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 2
自己卑下呈示実行頻度、不一致、交互作用項を独立変数とした重回帰分析の結果

	社交不安傾向				
	<i>b</i>	<i>SE</i>	β	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値
自己卑下呈示実行頻度	2.21	.23	.59 **	9.69	.00
不一致	0.51	.27	.12 +	1.87	.06
自己卑下呈示実行頻度×不一致	.09	.04	.10	1.59	.12
R^2			.38 **		

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考察

本研究は、CE 傾向が自己卑下呈示と社交不安の関連を調整し、典型性と社交不安の間には負の関連があり、不一致と社交不安の間には正の関連があると予想した。結果、自己卑下呈示と社交不安の間に正の関連が見られたものの、自己卑下呈示とCE傾向の交互作用は見られず、仮説は支持されなかった。このことから、日本を含む東アジア人は文化的に自己卑下を行い、それが適応的で周囲の人も行っている行動であると認識していたとしても、社交不安は高まり、要因としては卑下の評価からの回避であることが関係する可能性がある。